

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	原田 真澄
論文題目	人形浄瑠璃における太閤記物作品群の研究
審査要旨	
<p>本研究「人形浄瑠璃における太閤記物作品群の研究」は、18世紀後期以降の人形浄瑠璃において重要な位置をしめる、『太閤記』とその周辺に取材した作品群を取り上げた成果である。</p> <p>18世紀序盤までの近松門左衛門作品に集中してきた人形浄瑠璃作品研究史は、昭和後期から近松以後への研究が深まっているが、本研究は、さらにそれ以後の作品群の位置づけを促すものでもある。「太閤記の世界」生成をたどる上演史研究を第一部、個別の事例をめぐる作品研究を第二部として、先行する文芸作品への言及、同時代の風俗・流行の探究など、様々な研究方法を盛り込んで分析を行っている。</p> <p>以下、各章の概略を記してゆく。序論「太閤記物の成立と定義」は、本論文が取り扱う「太閤記物作品群」を定義する。18世紀後期からにわかに勃興する「太閤記の世界」は、「出世奴」「東山」の世界として認識されてきた作品群と重なりあうところが大きい。本論文では、秀吉没後の関ヶ原合戦や大坂の陣を題材とした作品をも「太閤記物関連作」として扱い、近世人にとって「現在と地続きで接続する過去」を歴史として相対化する視野を意識させたものとして、太閤記の世界を位置づけている。</p> <p>第一部「上演史研究」は、序章から第三章の四章からなる。序章「義太夫節以前の太閤記物」では、豊臣秀吉を扱う近世軍記や実録類から、小瀬甫庵の『太閤記』や読本『絵本太閤記』に至る文芸作品が紹介される。芸能面では、秀吉自身が関わる豊公能の研究史をたどり、読本浄瑠璃「太閤記」に至る背景を解き明かす。</p> <p>第一章「近世太閤記物戯曲史と人形浄瑠璃界」は、「十八世紀前半」と「十八世紀後半」に分けて、人形浄瑠璃史の動向を追いながら、その中でどのような太閤記物が初演されたかを概観している。近松門左衛門作「本朝三国志」に始まる太閤記物は、十八世紀前半には必ずしも多くの作品をみない。しかし、「祇園祭礼信仰記」が大当たりした宝暦期から様相が変わり、十八世紀末の寛政期には太閤記物の隆盛期を迎える。</p> <p>第二章「十九世紀太閤記物上演史の一側面」は、明和四年十二月竹本座初演の「三日太平記」(立作者・近松半二)を例にとって、竹本座退転に関わる初演時の状況と反響、十九世紀に入ってから上演頻度が増えてゆく様相を、上演史の精査によって確認してゆく。とくに、改題しての上演や、別作品との継ぎ合わせ上演の見られることを指摘、四十回確認できる通し上演の内、継ぎ合わせ上演が十三回(三十二・五%)に及ぶことを報告している。それは作品という側面からみれば、登場人物の行動理念や一貫性を失わせる場合もあるが、人形浄瑠璃上演史において、外題のみを追って抜け落ちる上演実態のある事例を付け加えている。</p> <p>第三章「近代の太閤記物上演とナショナリズム」では、近代期に太閤記物の上演頻度が上昇することの背景に、「近代のナショナリズム」につながる国家・社会の体制を指摘する。日清・日露戦争期には、海戦を描く時局物が上演されていた事実などを指摘、大流行した時局物「薫梅忠義魁」の反響(批判を含む)を分析している。</p> <p>第二部「作品研究」も、序章から第三章の四章からなる。</p> <p>序章「人形浄瑠璃における豊臣秀吉像」は、太閤記物大流行のさきがけとなった「祇園祭礼信仰記」を取り上げる。とくに高台寺の秀吉木像が、首(かしら)や装束のモデルとなっていたことをはじめ、近世当時の史実に即した感覚が、どのように作品に投影されているかを分析している。有名作であるにも関わらず、作品研究の少ない同作について、多くの図版を駆使して、図像学的な関心からも迫ったユニークな章となっている。</p> <p>第一章「秀吉と「謀叛人」」は、第一節「明智光秀」と第二節「別所長治」の二節からなる。</p> <p>第一節では、光秀を扱う作品群の代表作「絵本太功記」を取り上げて、作品評価の変遷と、作中での「謀叛」の捉え方を追っている。近世演劇では、政権篡奪者を「悪」とみなす図式が確立されているが、信長・秀吉・家康と変転する天下の情勢の中においては、立場によって「謀叛」の捉え方は異なる。「絵本太功記」における光</p>	

氏名 原田真澄

秀も、「傾城枕軍談」や「仮名写安土問答」との比較によって、独自の道義をもつ主人公として造形されていることが指摘され、近世における歴史認識の多様性を反映しているものと結論づけられている。第二節は、秀吉が別所長治の籠もる三木城を攻めた史実を背景に、「仮名写安土問答」の三段目の作品分析を行っている。「袖薄播州廻」に代表される歌舞伎での刑部物との影響関係を軸として、従来の作品評価への変更を迫っている。

第二章「織田家と秀吉」は、第一節「小野のお通」と第二節「天草四郎こと嶋勘左衛門」からなる。

第一節は、『浄瑠璃御前物語』の作者と伝説的に考えられていた小野のお通が、人形浄瑠璃の登場人物として様々に設定されている様相を分析し、併せて賤ヶ岳の戦いを扱う浄瑠璃作品を概観している。第二節は、延享四年初演の「傾城枕軍談」を取り上げ、七草四郎実は嶋勘左衛門を、井原西鶴『男色大鑑』に登場する嶋勘左衛門と、島左近の従兄弟の島勘左衛門が重ねあわされていることを指摘している。同作が関ヶ原の戦いを正面から描くのではなく、暗示するに留めている点からも、太閤記物謀叛人劇の嚆矢として位置づけている。

第三章は「豊臣家とその臣下」として、第一節「千利休」、第二節「小西行長」、第三節「石田三成」からなる。

第一節は「物ぐさ太郎」を取り上げて、千利休を扱う浄瑠璃作品を概観、歌舞伎での上演が多い上演史の特徴を指摘している。第二節は太閤記物のなかでの朝鮮軍記物を取り上げ、秀吉配下の武将のなかでも、これまで芸能畑からの論及が少ない小西行長に焦点をあてて、浄瑠璃と歌舞伎での小西行長を広く見渡して、独自の人物造形を分析している。第三節では、悪人・謀叛人とされることが多い石田三成を、肯定的に扱う「恋伝授文武陣立」を取り上げ、その人物造形の詳細な分析をおこなっている。

以上のように本論文は、近世演劇の中に重要な地位を占める太閤記物浄瑠璃を、正面から取り上げて対象化した初めての成果として、幅の広さと射程の深さを備えた各論から構成されている。これまでに作品研究の及ばなかった浄瑠璃や、従来の作品研究とは異なる視角から分析をおこなった作品の多さも特徴で、上演史への目配り、史実との比較、口碑や伝説など取材源の特定や、図像学的な検討など、作品分析にあたって駆使された方法も多彩である。正本研究をはじめ、近年の研究の進展を縦横に活用している点も特筆される。

取り上げた範囲の幅の広さは、第二部の作品研究において取り上げる人物の多彩さにもあらわれている。ただし、各章各節の論文自体はすぐれているが、それらが緊密に結びつき、太閤記物作品研究の体系が樹立されているかという点には、疑義も呈された。「物ぐさ太郎」や明治の時局物「薫梅忠義魁」を取り上げた点の是非、「別所長治」を謀叛人として論及するのであれば別所小三郎についてより詳しい言及が望まれることなどをめぐり意見も寄せられた。他方、さらに取り上げるべき人物を挙げることも可能で、大坂の陣について触れるところが少なかった点については、一層の研究の進展に期待したい。太閤記物研究を主題に掲げながら、周辺の人物を詳しく取り上げている一方で、太閤秀吉その人にさらなる検討が加えられてもよかった。近年とくに研究の進む実録への目配りなど、さらに深められるべき点なども指摘された。

しかし、とりわけ浄瑠璃研究として、太閤記物というジャンルを俎上にあげ、すぐれた成果を残したことは、問題なく審査委員会は意見の一致を見た。如上のような今後への期待を含めて、審査委員会は、全員一致して本論文に、博士(文学)の学位を授与するに値するものと評価した。

公開審査会開催日	2016年 4月 1日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	児玉 竜一	日本演劇研究	
審査委員	早稲田大学・名誉教授	内山美樹子	近世演劇研究	文学博士(早稲田大学)
審査委員	東京学芸大学教育学部・教授	黒石 陽子	近世文学研究	
審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	和田 修	芸能史研究	